

CPS 学生派遣事業

CPS 社会交流 CG では、学生のキャリアパス開拓の一環として、早稲田大学大学院政治学研究科が主催した夏期集中ワークショップ『科学を伝える作法を学ぶ～手から頭から』（詳細は最後のページをご覧ください）に学生を派遣しました。ここでは、サイエンスライティングを中心として、様々な科学を伝える方法について色々と学生が学んできました。

派遣した学生は下記の通りです。

1. 山本 由紀子(神戸大学大学院理学研究科)
2. 中原 容子(神戸大学大学院理学研究科)
3. 大原 啓(神戸大学大学院理学研究科)

< 実習の風景 >



それぞれの報告書は次の通りです。

申込者氏名：山本 由紀子

私が参加した夏季集中ワークショップ『科学を伝える作法を学ぶ～手から頭から～』は、9月18日から20日まで、早稲田大学で行われた。

探査機はやぶさの帰還や新型インフルエンザ問題など、科学的知識を必要とする報道は、社会に大きな影響を与えることがある。このような社会的関心が強い科学技術の問題を報道する際、誤解が生じたケースは数多くあり、情報を伝える方法のあり方に批判や関心が集まっている。

このワークショップは、新聞、テレビ、出版の分野で、科学を伝える仕事に携わっている方々による講義と、科学の話題を的確かつ魅力的に伝える文章スキル、デザインスキルを学ぶ演習を組み合わせで行われた。

講義内容は、子供に伝える科学、出版が伝える科学情報、新聞やテレビの科学報道、ジャーナリストが陥りやすい統計の罠、ウェブ時代における科学ジャーナリズムの科学、地球温暖化問題に関する科学ジャーナリズムの取り組みに関するものであった。演習内容は、科学を伝えるデザイン、科学情報発信のためのライティングスキル演習である。今回の活動では、近年の科学技術報道の課題を知ること、文章やデザイン手法を学ぶことを中心に、ワークショップ形式で“伝える”技術を磨くことを目的としている。

受講した講義や演習の中で、私の印象に強く残ったものを4つ挙げる。

講義では、一つは“子供に伝える科学”の講義で、メンデル工房のスタッフの話から、理科教育をより良くするために、①専門性を高めた人材が必要、②教える側の情報交換、③意欲や才能のある子供への対応を提案していたこと。また、ガリレオ工房のスタッフの話では、子供に科学を伝える活動の形態には実験のみでなく、絵本の読み聞かせや、ライブショーのような芝居という異分野との融合による手法を知ったことである。もう一つは、“新聞やテレビの科学報道”から、記者が選ぶ一次情報とその提供者の良し悪し、また、記者の科学情報に対する勉強、社内の教育体制の問題が、科学的記事の正確さに反映されることを知ったことである。

演習では、一つは、“科学を伝えるデザイン”である。今回、ポスターが題材であった。人々が宣伝を見る時間は3秒と短時間で、この間に取り込まれたものが記憶される。記憶に残すために、ポスターに盛り込む情報に優先順位をつける難しさを経験した。もう一つは“ライティングスキル演習”である。内容は、レゴブロックの組立説明書を文字のみで作成相手に組み立ててもらふこと、異分野の人と組んでインタビューを受けて400字程度の自己紹介文を書くこと、(任意提出の事前課題による)ラブレターを講評することだった。これらの課題から、伝えたい情報の階層化と同じ順序で書くことの重要性や、自分の思いや願いを相手に不快感を与えないように伝え説得する技術の習得を学び、ライティングスキルは、自分の文章を客観的な視点で読んでくれる人を見つけて、批評してもらふことで向上することを経験した。

このワークショップを通して考えたことを挙げる。我々が受け取る情報は、多くの人を

介在して届く。私達が目にする情報は、誰かの考え方のフィルターを通ることを避けられない。それに対して、情報の受け手である私達の情報を見る目も鍛え続けなければならない。また、研究者等の情報提供者が、誤解のないように一次情報を発信したはずが、マスコミ側で拡大解釈されることもある。マスコミ側も勉強が必要であるが、情報を渡す側もどのように伝わるのかをチェックする必要があると感じた。他には、私とは全く異なる分野の講師陣、フリーライターから会社員、学生と様々な分野の参加者と交流した。自分の考えを講義中の質問を通して表現し、異なるバックグラウンドを持つ人々の考えに触れたことである。

.....

申込者氏名：中原 容子

●ワークショップの目的

- ・新聞やテレビ、出版などで仕事をしている方々による講義から、「科学を伝える」ことについての現状や在り方を学ぶ
- ・科学の話題を如何に伝えるか、そのための文章・デザインスキルを、演習を通じて学ぶ

●内容・成果

講義：子供に伝える科学

伝えるかたちを科学するー編集

新聞やテレビの科学報道

命にかかわる科学技術はどう伝えられたか

ジャーナリストが陥り易い統計のワナ

地球環境問題にジャーナリズムは何ができるか

地球温暖化をどう伝えればいいのか

ウェブ時代における科学ジャーナリズムの科学

演習：文字の大きさや位置等を考慮し、ポスターをデザインする

レゴの組み立て説明書を作成→それに基づいてペアに組み立ててもらおう

自己紹介文作成、ペア同士のインタビューを基に

課題・ラブレターの添削

・講義の感想

伝える対象が

1.子供である場合…理科離れが進む今、イベントやスクールの開講によって子供の興味を引き出す。実体験や議論によって、科学に対する、子供の内面からの理解を得ることが出来るのだと感じた。こういった取組が全国レベルで普及すれば良いと思う。しかしそのイベントやスクールにかかる費用と内容との兼ね合い、中学生以上の生徒への対

応、実験以外の「机上の理科(科学)」を嫌う子供たちに何をすればいいのかといった問題が残っている。

2.読者、視聴者である場合…まずマスメディアは今日のような「上から目線」「他人事意識」を改め、今後は読者・視聴者とともに考え、知恵や情報を出し分かち合うことを重要視していかなければならない。また読者・視聴者のとるべき姿勢であるが、新聞、TV から得られる情報は、実際全てが真実ではない。よって全て鵜呑みにせず、データを自主的に調べ、検証することが大切だということがわかった。どの講義も実体論に基づいて構成されていたので、すごく現実味を感じることができた。

また編集のお話では、科学とは少しそれている感じもしたが、1つの本ができあがるまでを丁寧にレクチャーして頂いたので、とても面白かった。

・演習の感想

普段自分が当たり前として捉えているものに対し、実際に相手の関心や興味や理解を引き出すということが如何に難しいのかがよくわかった。このような機会でなければ、なかなか体験できないようなことばかり経験させて戴いた。

.....

申込者氏名：大原 啓

私は、「科学技術を社会に伝える」という意味での科学ジャーナリズムに興味を持っていました。むしろ、科学ジャーナリズムとはその様なものだと思っていました。そして、現在の科学ジャーナリズムの問題点、今後はどうなっていくべきかということを知りたいと考えて、今回のワークショップに参加をしました。

一日目の講義は、「子供に伝える科学」というテーマで、主に小学生向けに理科教育を行っている、理科教室の先生に、また「出版が伝える科学情報」というテーマで出版社で編集者をされている方にお話をさせていただきました。どちらの話も、私の中では「科学ジャーナリズム」というイメージのないものでしたので、大変興味深く、新鮮な気持ちで講義を受けることができました。演習では、ポスターのデザインを考えること、また自分で組み立てたブロックを文章だけで正確に伝える演習を行いました。ここでは、印象に残るレイアウトを考えるコツを学び、また目の前にあるものでさえ文章だけで伝えることは難しいという、なんとなく頭では分かっていたことを、実際に体感することができました。

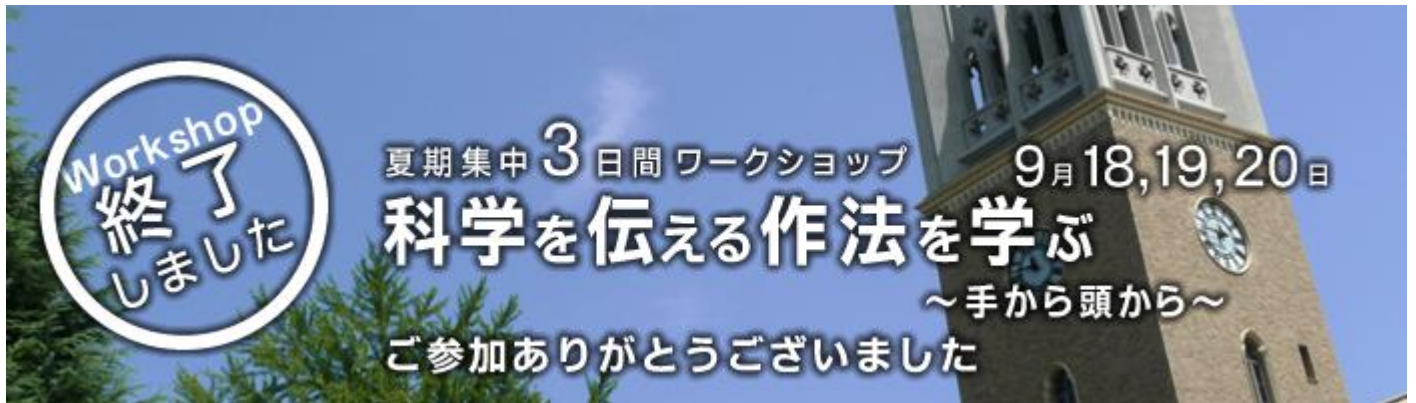
二日目の講義では、江戸川大学の隈本先生にお話をさせていただきました。ここでは主に新聞報道を中心に、科学報道の問題点、科学担当記者の考え方といったテーマでの講義でした。科学記事と実際にもとになった論文の用いられた箇所を見比べ、多くの問題があることを解説していただき、また日ごろ見ている新聞記事の中に、誤解を招くような記事があることに衝撃を受けました。二日目の演習は、「自己紹介文を書く」ということを行いました。隣の席の方と相互に添削しあいながら、何を中心にして伝えるか、また、どのような流れで話をつなぐかということを考え、紹介文を作成しました。私は

業界紙の記者をされている方に添削をしていただきましたが、修正点を多く指摘されて、自分のことなのに、多くの発見を知るという経験をしました。

三日目の講義は、まず新聞社で科学記事を書かれていた、フリージャーナリストの松村先生の講義でした。ここでは、環境問題を中心に、それを伝えるメディアの特性や、その弱点、今後のメディア、科学報道の在り方、といったこととお話ししていただきました。私は環境問題には以前から興味があり、書籍等を多く読んでいましたが、実際に報道された記事と見比べることをしたことはあまりなかったので、とても密度の濃い時間が過ごすことができました。また、早稲田大学の田中先生の講義では、インターネット社会における新しいジャーナリズム、また、科学リテラシーの形成される経路といったことを、メディアの科学報道の歴史を踏まえながらお話していただきました。ここでも、メディアの報道が、いかに一般人の考え方に影響を与えるかを再認識し、現在の科学情報の伝わり方を学びました。

実習三日間を通して、もともと私が持っていた「科学ジャーナリズム」が、とても狭い意味のものだったことを知り、また科学報道に対する見方を変えていく必要があることを学びました。そして「文章でだけ伝える」ということにはスキルが必要で、理解するだけでは簡単にはかけないということを感じました。

また、今回のワークショップでは社会人の参加者も多く、現在の科学報道、科学リテラシーに問題点を感じている人が多くいることを知りました。この経験を通して、科学技術を伝えることの重要性、また伝える側の人間として注意すべきことを学びました。今後も、このような活動に参加して、参加者の方々と問題点を共有し、また問題意識を持った人として、自分からも情報を発信していくことが大切であると感じました。



<http://smc-japan.org/?p=48>

夏期集中ワークショップ『科学を伝える作法を学ぶ～手から頭から』を実施します。 受講生募集中

9月の3連休を使って、科学技術報道の課題や文章力アップのスキル、デザイン手法などをコンパクトに学べるワークショップを実施します。

口蹄疫、インフルエンザでは、科学的な知識の報道が社会に大きな影響を与えました。探査船「はやぶさ」の帰還に際してはにわかに関心が集まりました。社会的な関心が高い科学技術の問題では、伝える方法のあり方にも関心や批判が集まります。

このワークショップでは、新聞やテレビ、出版などで科学を伝える仕事をしている方々をお招きし、現状やあり方について講義をいただく他、科学の話題を的確に魅力的に伝えるための文章スキル、デザインスキルなどを実際に手を動かして楽しく学んでいただけます。早稲田大学大学院ジャーナリズムコースの教員と科学コミュニケーターによる講義と演習を組み合わせたプログラムです。

科学技術情報の発信に関心がある、メディアにお勤めの方、研究者の方、企業やNPOで広報などを担当している方々に参加していただきたいと考えています。

*本ワークショップは、早稲田大学大学院ジャーナリズムコース夏期集中講義「科学技術ジャーナリズム概論」の授業と連携して実施されます。

日時： 9月18日(土)～20日(祝) 10:00～17:00
会場： 早稲田大学 早稲田キャンパス
受講料： 15000円

科学技術情報の発信に関心がある方。研究者やマス・メディアにお勤めの方にもおすすめです。

対象：
定員： 30名

下記メールアドレス宛に、[お名前、ご所属、連絡先（メールアドレス）]をお知らせ下さい。
追って返信致します。

申し込み方法 workshop {at} smc-japan.org
申し込み締め切り 8月31日

講義概要： 新聞やテレビの科学報道
出版が伝える科学情報(デザインを考える)
命に関わる科学技術はどう伝えられたか
ジャーナリストが陥りやすい統計のワナ
地球環境問題に科学ジャーナリズムは何ができるか
子供に伝える科学
ウェブ時代における<科学ジャーナリズムの科学>
科学情報発信のためのライティング・スキル演習など
難波美帆（早稲田大学大学院政治学研究科准教授）
松村由利子（サイエンスライター）
隈本邦彦（江戸川大学メディアコミュニケーション学部教授）
富田誠（早稲田大学大学院政治学研究科非常勤講師）

講師： 他
サイエンス・メディア・センター
難波美帆

お問い合わせ先 Mail: workshop@smc-japan.org
Tel: 03-3202-2507